Vol.45

ゆうことみゆきのふくふくトーク

ソンコ de ソンコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた本田優子（札幌大学副学長）と村木美幸（アイヌ民族博物館専務理事）が、その魅力をソンコ（＝お便り）形式で語り合います。

イラスト／安田千夏

ラッコ（ラッコ）

お腹に石を乗せ昆布の海に浮かんでるかわいいラッコ！でも、ラッコって名前、実はアイヌ社会から入ってきたって知ってる？江戸時代、北千島のアイヌが捕った大量のラッコの毛皮が、松前藩経由で江戸社会に流入したんだって。名前も毛皮と一緒に入ってきたのかな。ラッコの毛皮は、現在世界最高と言われるクロテンの毛皮すら足元にも及ばない超ミラクル極上品質！一平方センチメートルあたり十万～十四万本の毛が密生してるの。だから、トドもアザラシも極寒の海に生きる動物たちはみんなコロンコロンなのに、ラッコは毛皮を脱ぐと超スリム。皮下脂肪無しで氷の海で生きてるんだから、毛皮の凄さがわかるよね。

ところで、ラッコはどうして仰向けに浮かんでるのでしょう？実はラッコは約百万年前に海に進出したカワウソ。そのままでは北の海で暮らせないから、毛皮をスーパーグレードアップしたのです。でも毛があまり生えていない手足の先が海中で凍えてしまうから、ひっくり返ってお腹の上に乗せるようになったんですって！すごいことに、アイヌの人たちはこのカワウソ→ラッコの関係に気づいていたみたい。だって、ラッコの本来のアイヌ語名は「アトゥイ・エサマン（海・カワウソ）」なの。でも、夜、その名前を呼んではいけないというタブーがあって、ラッコと呼ばれたとのこと。その別名の方が外来語として日本社会に浸透したんだから、なんだか不思議だよね、美幸さん。

とっても愛くるしいラッコですが、ユカラ（英雄叙事詩）に出てくるラッコは一味違うの。黄金のラッコ退治の話に、各地のコタンから男たちが集まってきては、黄金のラッコを捕まえようと海中に入るがみんな死体となって岸に打ち上げられる…。と腕に覚えのある男たちでも倒すことができない強いイメージで語られるの。

秦檍麿（はたあわきまろ）の書いた『蝦夷島奇観』にラッコの図とともに「ウルップ島…この島に渡りて、猟馬（ぶつこ）を獲る。大サ六七尺、毛厚くして、縦横上下のワかちなく、色紫黒。席皮の上品とす…」という解説が。ラッコの毛「縦横上下のワかちなく」ってどんな状態？と思うでしょう。これは触ってみるとわかるの。毛って流れに逆らうと元に戻ろうとするよね。でもラッコの毛は、右に撫でれば右、左に撫でれば左と上下左右どの方向に撫でても戻ることが無いの。昔、父によく「こ～の、ラッコの皮！」と怒鳴られたり、からかわれたりしたの。きっとラッコの毛と同じでどっちにもなびく八方美人のような、調子の良い子供だったんでしょうね。

先日、北海道博物館の特別展でラッコの毛皮の展示が。何でラッコ？と思ったら、クナシリ・メナシの戦いに関係したアイヌ十二人の肖像画『夷酋列像（いしゅうれつぞう）』の中のウラヤスベツ（現在の斜里）の首長マウタラケが座る敷物としてラッコの毛皮が描かれているからとのこと。優子さんはラッコの毛、触ったことある？私は剥製の毛を一度だけ触ったことが。本当にどの方向にもなびくし、柔らかかった～。 J

■本田優子（ほんだゆうこ）：金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸（むらきみゆき）：白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏（やすだちか）：神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。